南北朝時代の土御門東洞院内裏について

A STUDY ON TSUCHIMIKADO-HIGASHINOTOIN DAIRI IN THE PERIOD
OF THE NORTHERN AND SOUTHERN DYNASTIES

藤田 勝也*

Masaya FUJITA

The purpose of this paper is to clarify the site plan and the plan of the main building of Tsuchimikado-Higashinotoin Dai-ri. By this study, I tried to confirm the influence of Tsuchimikado-Higashinotoin Dai-ri on Oeido-Dai-ri, and suggested the importance of the gijosho.

The treatise is organized in the following manner:

Introduction

Chap.1 The site plan of Tsuchimikado-Higashinotoin Dai-ri.

Chap.2 The plan of shinden, shinden-nishi-rou and kogosho.

Conclusion

Keywords: dai-ri (Imperial Palace), the period of the northern and southern dynasties, shinden, kogosho

内裏、南北朝時代、寝殿、小御所

はじめに

建武4年(1337)9月、北朝の光明天皇が遷幸した当時の土御門東洞院殿は、後深草上皇の皇女陽徳門院の御所であり、建物は遡って永仁4年(1296)正月、上皇が妻妾藤原相子のために新造したものであった。また方一町敷地の南半は新長講堂が占める。南北朝時代の土御門東洞院内裏は、したがって成立事情と規模ともに皇居として甚だ便宜的かつ不十分だったことになる。しかし当初北朝方に用いられた内裏は南北朝統一後も継続使用され、15世紀初頭の罹災まで60余年にもわたって存続、なおかつその後も皇居は不動で明治維新を迎えている。このように実際には内裏の当該期における実態を示す存在としてはもとより、その後の内裏の始発点としても、住宅史上重要な位置にある。

本稿の目的は、一つに関連史料の再検討を通しての、邸全体の建物配置に関する具体的な推定復元図の作成、いま一つに主要建物の平面構成についての私案の提示である。もって内裏の南北朝時代における空間的特質の解明および中世～近世内裏への展望のための基礎資料としたい。

なお周知の如く、沿革ならびに建築に関する先学の詳細な検討によって、邸の全体景観の概要が明らかにされ、また寝殿や小御所など主要建物の平面が推定復元されている¹⁾。本稿はそれら先学の研

究成果に負うところ大きく、既知の史料・指図を引用ならびに紹介する一方で、叙述の煩瑣を避けるため、また紙幅の都合上、先学との見解の大小相違点について逐一明示せず、必要最小限の提示に留めている。この点あらかじめお断りしておきたい。

1 建物配置の推定

本節では、邸全体の建物配置の推定復元を試みる。

光明天皇遷幸後、光明・崇光・後光厳・後円融・後小松と都合5代の天皇が居住した建物は、応永8年(1401)焼失まで約100年もの長期にわたって使用されている。その間確認し得る主な修理は3回。1回目は光明天皇遷幸2年後の暦応2年(1339)11～12月、2回目は光厳天皇の康安2年(1362)3～4月、そして3回目は同じく光厳天皇の貞治5年(1366)8～12月の修理である。最初の修理はおそらく女院御所から内裏への転用に伴うもの。2回目の詳細は不明だが、3回目は修理期間からも推測される通り、寝殿を中心に比較的大規模なものだったらしい。

以下、便宜上これら修理を画期に皇居利用期間を3期に区分する。すなわち光明天皇遷幸後の暦応2年(1339)修理～康安2年(1362)修理の25年がⅠ期、その後貞治5年(1366)の2度目の修理までの4年がⅡ期、そして応永8年(1401)焼失までの約40年がⅢ期であ

* 福井大学工学部建築建設工学科 助教授・工博

Assoc. Prof., Dept. of Architecture and Civil Engineering, Faculty of Engineering, Univ. of Fukui, Dr. Eng.

る²⁾。ただ以下検討の通り、Ⅰ～Ⅲ期を通じて邸景観は大きな変化なく推移した模様であり、また関連史料は期間の長いⅢ期に偏する。そこで本節の建物配置ならびに次節の建物平面に関する推定復元では、Ⅲ期を中心にしてⅠ期・Ⅱ期の史料をもって補う方法をとる。

1) 諸門

方1町敷地の南半は新長講堂が占め、西は東洞院大路、東は高倉小路、北は正親町小路に面する。路に開く門は都合5棟。邸のハレ面にあたる東洞院大路に面して、南方に正門としての四足門を開き、北方には唐門があった。東の高倉小路にはおそらく四足門に相対する位置に棟門、その北方に土上門を開き、さらに北の正親町小路にも門があった³⁾。

2) 邸の南方——寢殿と小御所——

『門葉記』(巻五一、長日如意輪法三) 応安元年(1368)5月3日の長日如意輪法時の指図【図1】によって、邸南方における主要建物の配置と平面構成が窺える。敷地西面の東洞院大路、南隣の新長講堂ともに築地塀で画し、東洞院大路をはさんで西隣は新中納言実綱邸で、大路中央に裏築地を築く。四足門を入ると土廊中央に中門があり⁴⁾、土廊の北は途中床張りの南北廊となる。その北側は寢殿西面北部に繋がる東西棟の廊(以下、「寢殿西廊」と仮称)に接続する。寢殿西面南端に階段があり、土廊を設ける。寢殿東面南端から東方にのびる廊は途中L字に南折の後、寢殿東南部に位置する小御所の北面西端へと繋がる。寢殿南庭には東に桜、西に橘を植える。

以上【図1】はⅢ期の状況を示す。ただし文和元年(1352)8月の、弥仁親王(光厳)の元服・踐祚の儀場として、寢殿・東小御所が確認できる⁵⁾。小御所はさらに溯って、暦応2年(1339)修理直後の同3年(1340)3月の内侍所遷御先として、また翌暦応4年(1340)1月にも仏事道場としてみえる⁶⁾。建物配置に大きな改変無ければ【図1】の寢殿・小御所を中心とする邸の状況はⅠ期に溯る可能性がある。

なお中門北の廊は、その南第4・5間の2ヶ間が宜陽殿に擬されている⁷⁾。宜陽殿には西妻戸があり、関連して床子座、宣仁門、敷政門のほか、陣や陣小庭、日華門代など諸記録に散見する。無名門代が殿上のあった寢殿西廊(次節第2項参照)の西方辺りに存したようだが、場所ならびに相互の位置関係の特定は困難である⁸⁾。

3) 寢殿東方と泉殿

邸の主要建物として寢殿・小御所のほかに泉殿がある。『愚管記』延文5年(1360)6月27日条はその「出来」を記す⁹⁾。しかし5年前の『園太暦』文和4年(1355)8月5日条に「花山・徳大寺并彈正親王、議定之後、於禁裏之泉有御会云々、」とある、議定始後の和歌会場としての「泉」を泉殿とすると¹⁰⁾、泉殿はⅠ期のより早い時期に溯ることになる。

さて『門葉記』(巻三一、安鎮法四) 所載の、貞治5年(1366)12月23日安鎮法の指図【図2】では、泉殿の一部を寢殿の東、小御所の北に近接して描く。しかしこれには疑義がある。

『後光厳院御記』応安3年(1370)11月14日条¹¹⁾に、

亥剋許座主尊道親王參、神事中不可然歟、申可退出之由、然而散斎不堅固之上、旁依有可仰事、召泉屋、〔依別郭也、〕隔間対面、雑談頗移剋、(ただし〔 〕は割注を示す。以下同様。)

とある。青蓮院入道尊道親王が後光厳天皇に拝謁・雑談した泉殿(泉屋)は、「別郭」にあった。しかも泉殿新造について記す『迎陽記』

応永5年(1398)7月5日条¹²⁾に「今日禁裏泉殿新造、御舟鋪設等被調、」とあり、「御舟」の存在を明記する。泉殿は池を設けた庭園中に立地したのである。そして泉殿は北向きの相当に大規模な建物だったという¹³⁾。応永9年(1402)再建の応永度内裏では、泉殿は敷地東北部を占める。西ハレの邸においてその位置は泉殿に最も相応しい。おそらく南北朝時代から泉殿は敷地東北部に存し、しかも別郭を形成していたのである。応永度の泉殿再建は応永13年(1406)であって、寢殿などより遅い¹⁴⁾。それは泉殿が別郭にあったことによるのではないか。泉殿が寢殿東方に存したことは確かに間違いない。しかし【図2】が描くほどには近接していなかったのである。

実際の寢殿東方は、より広い庭であった。

寢殿東北に東面する議定所があり(次節第1項参照)、この議定所正面の庭(東庭)で蹴鞠が行われている。貞治2年(1363)5月11日の「晴」の蹴鞠御会を記す『貞治二年御鞠記』¹⁵⁾によれば、議定所東簀子に天皇御座を置き、東庭には桜・松・楓・柳の鞠懸を植え鞠場としている¹⁶⁾。鞠場の南に前関白二条良基や見證公卿の座、北には立蒨に沿って関白近衛道嗣の座、その末に鞠足の公卿や殿上人等の座を置いた。さらに同じく鞠足の、賀茂輩の円座は、鞠場東方にある「渡殿」の下方、その「西砌」に敷いたというから、渡殿は南北棟だったろう。すなわち鞠場＝議定所東庭は、北は立蒨、南は小御所ならびに寢殿～小御所間を結ぶ廊、東は南北にのびる渡殿によって圍繞された空間であった。はたしてこの議定所東庭を「東向御壺」¹⁷⁾「御鞠壺」¹⁸⁾と呼称する事実が、その圍繞性を示唆する。鞠場として少なくとも方5丈以上の広さはあったろう¹⁹⁾。

4) 対屋と台所

対屋と台所の位置関係ならびに各々の規模については、後光厳天皇の倚廬遷御を記す『師守記』貞治3年(1364)7月26日条所載の指図【図3】に窺える。これによると倚廬となった「対屋」²⁰⁾は桁行5間梁間2間の東西棟で、その北隣、西寄りに雁行して「台所」がたつ。台所は推定桁行5間以上、東西棟の建物である。

両者は邸内の何処に存したのか。まず延文4年(1359)4月12日の議定所東庭での「内々御鞠」における、公家・僧・武家輩の見物の様子を、『園太暦』当日条は「随所縁申賜休所、対屋・台所等為其所、於其内見物、或立馬道、立蒨開穴、又自欄文上見之云々、事儀狼藉、未曾有事也、」と記す。両者ともに議定所東庭での蹴鞠見物可能な場所に存したのである²¹⁾。【図3】は対屋南面西端から南方へ土間床、吹き放しの廊を描き、「渡御々路渡殿也掃部寮儲筵道修理口敷打板」と記す。併記される「キザ階」は廊南方の床張り建物との接続を示唆する。そしてこの倚廬遷御について『迎陽記』当日条²²⁾は、

出御々殿東西(面力、筆者註)巽角妻戸、〔左右供掌灯、〕經透渡殿并小御所西北面、渡御東対倚廬、自東二間入御、…(下略)

と記す。かかる遷御経路から推測するに、蹴鞠庭(議定所東庭)の東を画する前記の渡殿が、小御所の北面、おそらく妻戸のある東端から北にのび、途中土廊となって倚廬の対屋(＝東対)南面西端に至る、と考えられる。すなわち対屋・台所は寢殿東方、蹴鞠庭を臨む位置にあって、対屋～小御所間は渡殿で結ばれていたのである。

『迎陽記』が「東対」と記すこの対屋とは別に、複数の対屋があった。同記が女房退出の経路を記す中に「其路西自対東妻至門敷筵道、出北門、」とある「西対」がその一つ。東対の西方、おそらく寢殿北方に位置したと推定される。

『後愚昧記』応安7年(1374)5月10日条によると、明け方生起した門警固の番衆殺害事件の現場は「内裏東洞院面北寄唐門前〔長橋前也、〕」であった。さらに延文3年(1358)6月24日、足利義詮の使者として参内した左衛門佐石橋和義がまず控えた場所を『園太暦』当日条は、後聞とはいえ「西面对屋妻長橋辺」と明記する。つまり唐門前は「長橋前」でもあって、長橋は「西面对屋」に接続していた²³⁾。またいっぽう「北二対屋」の存在から、寝殿北方に最低2棟の対屋を想定し得る²⁴⁾。そこで「西面对屋」の東隣に別の対屋1棟が存したことになる²⁵⁾。ただ何れが「西対」「北二対屋」か、特定はできない。とまれ、この唐門・長橋・対屋(西面对屋)の空間構成は応永度内裏に忠実に継承されていて注目される。

さて『門葉記』(巻三、安鎮法四)貞治5年(1366)12月27日条に、寝殿四面の桁中央に打たれた札のうち、寝殿北面のそれについて以下の如き留意すべき記述がある。

次北方〔此方底板敷未敷之間召寄橋了、又此中央他御所被造続之間、中央聊西寄打之、…(下略)〕

寝殿北面の、札を打つべき中央間(【図2】に「札」と記す。次節第1項参照)には、「他御所」への通路があった。それを考慮して札は中央より若干西寄りに打たれたのである。寝殿北方の「他御所」について管見では全く史料を欠く。応永度内裏の場合、清涼殿北面西端から廊が北方へのび「対屋七間」へ連絡する。対屋七間は西端に長橋を付属する邸西北部の対屋であって、この内裏では「西面对屋」に相当する。そこで寝殿～西面对屋間の連絡通路を想定し得る。

2 建物平面の復元

本節では平面の推定復元が可能な寝殿・寝殿西廊および小御所について検討する²⁶⁾。

1) 寝殿

寝殿規模は方7間であった。【図2】で正・側面とも7間とし、【図1】でも正面7間に描く。『門葉記』(巻三、安鎮法四)貞治5年(1366)12月27日条に「次廻御殿東面於中央間〔四方皆七間也、仍中央ト云ハ四間目也〕立鞍懸…(中略)…奉行取出札一枚…(中略)…桁中央〔中ノタルキノトノホリ也〕打之、」とあり、「四方皆七間」とする。札の打たれた四面各々の桁中央が「四間目」というのも証左となろう。これは【図2】の、「札」の記載位置によって確認できる(東面のみ「札此間打之」)。

(1) 寝殿南半

寝殿は紫宸殿を兼用しつつ²⁷⁾、清涼殿に準じる室構成をとった。【図1】【図2】によると、南3間目の東西柱列を境に内部は大きく南北に分かれる。南半は中央の正面5間奥行2間が母屋、南柱間1間通りは南庇で、「昼御座」にあてられている²⁸⁾。母屋東方、東庇の東西1間南北2間は「二間」である。

『愚管記』永和元年(1375)2月21日条は鬼間での議定始について、「今日鬼間議定始也、…(中略)…先何見鬼間、〔御殿西端南北二間二間也、西面格子上之、同妻戸取扉、南面格子下之、座上下在高燈台、以北為座上、…(下略)〕」と記す。「鬼間」は「御殿西端」に位置し、南北2間で2ヶ間を占め、西面2間は格子と妻戸、南面1間には格子が装置されていた。さらに列席者の座について記す同条から、鬼間西面2間について妻戸は南、格子は北であったことが判明する²⁹⁾。そこで鬼間は寝殿西南隅の南北2間東西1間の空間に

比定し得る。鬼間のこの位置は、応永度内裏の、東面する清涼殿において鬼間がその東南部を占めたのに照応する。

(2) 寝殿北半

寝殿北半は【図1】によると、母屋の北奥、東西3間南北1間の室が「夜御殿」で、また西庇の寝殿西廊辺りに「朝餉」がある³⁰⁾。この朝餉については応安元年(1368)5月13日の、豊原信秋による後光厳天皇への笙伝授の場所として「朝餉前庭」がみえる³¹⁾。つまり庭に面していたのである。そこで朝餉は寝殿西廊の南の坪庭に面する空間、鬼間の北隣に想定される。寝殿南半にくい込むが、これは応永度内裏の朝餉が鬼間西隣にあって、寝殿東半にその一部を占めたのに対応する。要するに【図1】における「御聴聞所」の南1ヶ間は鬼間北半、北1ヶ間は本来朝餉であった³²⁾。

【図1】では「二間」の北隣、夜御殿の東隣を「議定所」とする。応安元年(1368)3月10～16日の後伏見天皇三十三回聖忌追善懺法の道場は議定所で、『仲光卿記』応安元年(1368)3月10日条³³⁾に指図【図4】を収める。また『門葉記』(巻四、仏眼法二)永徳元年(1381)4月29日条は、議定所での仏眼法の指図【図5】を示す。【図4】は「承仕候所」にあてられた「二間」の北隣に議定所を描き、その位置は【図1】と一致する。議定所は東向で、規模は【図4】【図5】から東西2間南北4間と判明する³⁴⁾。

寝殿規模が方7間、議定所が南北4間とすると、議定所北は外部に面する、はずである。ところが『仲光卿記』応安元年(1368)3月10日条によると、そこは天皇が出御した「御聴聞所」であって、【図4】は天皇の御茵や女房候所の室礼を描く。【図5】でも「御聴聞所」と記す。【図4】によると伶人公卿や殿上人の座は東面簀子上で、さらに東外側には、地下所作人座のために落庇を修理職が仮設している³⁵⁾。いっぽう議定所北隣の空間が仮設されたようには見えない。伶人公卿座の北半ならびに殿上人の円座は議定所北隣の東簀子上で、落庇もまたそれに対応して仮設されている。議定所北の室の存在はまず間違いない³⁶⁾。【図2】において、寝殿北面の東第4列目の、柱筋北方1間の位置(北面の「札」の北東位置)に記された柱が、室の存在を示唆する。寝殿規模は方7間、しかも議定所北に室があったとすると、そこは寝殿規模に算入されない空間、あるいは下屋だったのではなかろうか。その規模は南北1間、寝殿北面中央における通路の存在から、東西はおそらく3間か³⁷⁾。

そのほか記録にみえる北半諸室に、御手水間・常御所・御湯殿上・御末がある。

御手水間は夜御殿近くにあったが詳細は不明³⁸⁾。常御所については『園太暦』文和5年(1356)正月16日条に「実繼依召参御前、〔常御所候簾代、〕」とあり、「簾代」すなわち次の間が存した。ただしこれはⅠ期であり、Ⅲ期とは状況が異なる可能性がある³⁹⁾。常御所と御末は近くにあった⁴⁰⁾。また『迎陽記』応永5年(1398)正月5日条⁴¹⁾に、記主東坊城秀長の後小松天皇への見参の場としてみえる「御湯殿末」が御末と同義なら、御湯殿上もまた常御所に近い。つまり常御所(および簾代)・御湯殿上・御末の3者は隣接していた。このことは応永度内裏の清涼殿、さらに応永度内裏焼失後の仮皇居、伏見宮貞成親王御所の寝殿にも通じる⁴²⁾。

それら諸室の位置関係ならびに規模は明らかでない。後述する【図6】における「常御所之末」の記載や、「台盤所→黒戸内→常御所」(台盤所・黒戸については次項)という摂関の進入経路⁴³⁾は、常御

図1 南北朝時代の土御門東洞院内裏 『門葉記』(巻五一、長日如意輪法三) 応安元年(1368)5月3日条所収

図2 安鎮法指図 『門葉記』(巻三一、安鎮法四) 貞治5年(1366)12月23日条所収

図4 説定所指図 『仲光卿記』 応安元年(1368)3月10日条所収

図3 封屋・台所指図 貞治3年(1364)7月26日条所収

図5 議定所指図 『門葉記』(巻四一、仏眼法二) 永徳元年(1381)4月29日条所収

図6 寝殿西廊指図 『公清公記』観応元年(1350)3月22日条所収

図8 小御所五壇法指図 『門葉記』(巻三六、五壇法一) 永和4年(1378)10月16日条所収

図9 小御所推定復元図 (川上貢『日本中世住宅の研究』墨水書房、1967年、pp167)

図7 寝殿西廊指図 『建保承久宝治建治年中詩歌作文会記』 文和5年(1356)2月30日条所収

図10 小御所南面の攝政直廬指図 『後愚昧記』 永徳3年(1383)3月28日条所収

所を寝殿西北部に推測せしめる。しかし特定する史料は欠き、その他各室の規模も明確にし得ない⁴⁴⁾。中でも御湯殿上・御末は、応永度内裏では清涼殿西北部に突出する。これについても不明である。

2) 寝殿西廊

【図1】が描く寝殿西面の廊2棟のうち、南側の土廊は軒廊⁴⁵⁾に用いられた。北側の寝殿西廊は図では南半のみを描写し、北端に「台盤所」と記す。

『公清公記』観応元年(1350)3月22日条⁴⁶⁾は、当日黒戸で開催された「藝」の作文御会の、会場周辺の様子を図示する【図6】。この図によると寝殿西廊の南北2間分のうち、会場の黒戸は北半で、南半は台盤所である。そして台盤所西隣は殿上で⁴⁷⁾、黒戸北側は簀子であった⁴⁸⁾。黒戸ではこのとき東第1間に天皇御座、同第2・3間に奥・端分かれて公卿座が敷かれた。また『建保承久宝治建治年中詩歌作文会記』⁴⁹⁾は、文和5年(1356)2月30日の詩歌御会の会場となった黒戸の図を載せる【図7】。御座は東端にあって西向の横座とし、公卿座を奥・端に対座する室礼は【図6】と同様である。ただし御前西方の読師座の便宜から、端の末座の畳1帖は撤去している⁵⁰⁾。【図6】【図7】によって黒戸の建具装置を見ると、北面は東から障子・格子・妻戸、南隣の台盤所とは各柱間とも障子で画し⁵¹⁾、西面は通常遣戸を装置した。東面は両図からは不明だが、壁であった⁵²⁾。また台盤所の南面は、【図1】によると東第1間が遣戸、同

第2・3間は格子、東面は不明だが妻戸だったらしい⁶³⁾。また台盤所南方は南面の格子が示唆するように、広庇であった。「台盤所南広庇」⁶⁴⁾「台盤所前庇」⁶⁵⁾ともみえ、【図1】では中門廊や寝殿西・南・東面の簀子とともに僧衆参入経路(破線)の一部をなす。

以上、寝殿西廊の規模は東西3間南北3間で、南面は広庇、その北に台盤所、黒戸があり、台盤所西隣は殿上にあてられた。なお【図6】【図7】ともⅠ期に属し、Ⅲ期の【図1】とは時間差があるところに課題を残す。

3) 小御所

『門葉記』(巻三六、五壇法一)に、永和4年(1378)10月16日の小御所での五壇法の指図がある【図8】。この【図8】をもとにしつつ、小御所を描く【図1】【図2】によって補訂、推定されたのが復元図【図9】⁶⁶⁾である。これによると小御所は南北5間東西6間の建物の東北隅に、方4間の建物の西南隅を重ねたが如き平面を有する。前者の南面がハレ、北面がケの空間で、後者の方4間の空間は側近奉仕者の控室だったという。

永徳3年(1383)3月26日から3日間、縣召除目があつた。その終夜にあたる『後愚昧記』28日条は、前内大臣保光によって4月4日に注送された「除目散状」を載せる。注目すべきはその末尾に「摂政直慮指図〔内裏 小御所也、〕」と記し、【図10】を付載することである。つまりこのときの除目会場は【図10】が示す、摂政二条良基の小御所内の直慮であった、というのである。「東」「南」の記載から【図10】は上を北とする。この【図10】と【図9】を比較すると、南面柱間6間で等しく、西面南第1・2間の格子、南面東・西端の妻戸も全く一致し、階段や簀子高欄の状況も両者矛盾しない。柱や間仕切建具の有無など若干の異同はあるが⁶⁷⁾、しかし【図9】の如く推定復元された小御所の南面を【図10】が示すことは疑いない。すなわち除目会場(=摂政直慮)は小御所南面の、西第2間から東方、東西4間南北2間の空間であり、その東隣の東西1間南北2間は「公卿休所」にあてられたのである。

ここで留意すべきは、【図10】には小御所南面東端から南方へ伸びる廊が描かれることである⁶⁸⁾。この廊は【図9】では復元されていない。【図9】の推定復元にあたって参看された図のうち、小御所の南面を描くのは【図1】【図8】である。【図1】では南面簀子が東端の妻戸正面まで、必ずしも明瞭ではないものの描かれるし、さらに間近に迫る南方の築地塀が、廊の存在に否定的である。【図8】でも南面簀子は【図1】以上に明示される。しかし【図8】で看過してならないのは、南面東第2柱筋やや西寄りの位置において、簀子から南方へ伸びる南北線である。五壇法道場に廊は直接関係ない。しかし存在した事実は示唆する。これはそのための線ではないか。

小御所には、直慮とともに記録所が置かれている⁶⁹⁾。関白二条良基の内裏への参入経路について、『迎陽記』貞治3年(1364)8月9日条⁷⁰⁾は「於正親町高倉御下車、入自東門、自記録所南面脊脱、御参本殿、」と記す。東門(おそらく棟門)から参入後、記録所南面より昇殿、という良基のこのアプローチは、Ⅱ期における記録所の廊内での存在を示唆する⁷¹⁾。応安元年(1368)頃、記録所に目隠し用の板垣設営が企図されている⁷²⁾。はたして【図10】には廊東面に垣がみえる。【図1】では確かに廊の描写はない。しかし【図1】を遡るⅡ期にはすでに廊は存したようである。応永度内裏でも当初、南北5間東西4間の小御所の、東南部に接続する南北廊があり、その北

部分がやはり記録所にあてられている。この内裏の記録所を踏襲してのことであろう。

位置的関係において、また用途上からも、小御所はもう一つの御所として寝殿の二次的役割を担っていたという⁷³⁾。【図10】に破線で示される「筥文路」からも窺えるように、出入口機能をときに担う中門廊の如き廊の存在は⁷⁴⁾、かかる小御所の性格をさらに裏付けるものといえるだろう。

おわりに

以上、建物配置および平面の復元考察の結果をまとめ作成したのが、推定復元図【図11】である⁷⁵⁾。

邸の全体景観に関して新たに明らかになったのは以下の諸点である。①寝殿・小御所・対屋各々を結ぶ連絡通路(渡殿)の存在、②敷地東北部に泉殿を設置、しかも別郭を形成、③西面北方における唐門・長橋・対屋の構成、そして④路に開く都合5つの門の存在。これらはいずれも、この内裏が応永度内裏に強く影響したことを示すものである⁷⁶⁾。かかる影響力の強さは、建物平面からも容易に読み取れる。寝殿(応永度では清涼殿)と小御所における類似性はすでに指摘されるどころだが⁷⁷⁾、本稿での再検討によって、寝殿では屋御座・鬼間・朝餉の位置関係、また小御所の場合、付属する廊の存在がその事実を一層明確にしていることが明らかとなった。

さて寝殿で注目されるのは、屋御座・常御所といった旧来の空間とともに一定の場所を占める、議定所の存在である。3者の位置関係を見ると、まず屋御座は南面し、応永度内裏では東面する。それはハレとケをこの内裏では紫宸殿兼用という事情から南・北に、応永度内裏では東・西に分けることによる。常御所は当然ケの領域にある。しかも何れの場合も北面するところに特徴がある。これに対し議定所はともにケに属しつつ、この内裏では東面、一方の応永度内裏では西面し、なおかつ屋御座・常御所と同様、独自に前庭を伴う。同じケの常御所とは一線を画す。そこで議定所はハレとケの中間的な空間、あるいはハレでもケでもない空間として存したのではないか、との推測を抱かしめる。もしそうであれば議定所は、中世前半の弘御所や歌合の空間、あるいは会所にも通底する空間⁷⁸⁾の、清涼殿内でのあり方を示唆していて看過できない。

屋御座や常御所がそうであるように、議定所も前庭と一体的に把握する必要がある。この内裏の議定所では、議定はもとより和歌・詩歌会が開催され、またその前庭は蹴鞠庭となっている。そして蹴鞠には、「晴」と「内々」の両様の事例がある⁷⁹⁾。下って康正度内裏の議定所前庭は、卑賤民による千秋万歳や曲舞など雑芸の場であった⁸⁰⁾。さらに彼等が属する声聞師集団の一つ、大黒党が、議定所前庭の管理を任されていた、という注目すべき事実がある⁸¹⁾。もっとも清浄であるべき禁中、しかもその中枢たる天皇御座所におけるかかる状況が意味するものは何か。議定所とその前庭の空間が果たした機能や性格について、南北朝時代の内裏以降、中世末期からさらには近世内裏をも視野に入れつつ考察する必要があるだろう。

とまれ議定所の如き空間を内包する内裏の、空間的特質および住宅史における歴史的意義解明のための詳細な検討は別稿に委ね、南北朝時代における土御門東洞院内裏の景観ならびに建物平面の推定復元を目的とした小論は、【図11】の提示をもってひとまず終えたい。

— 273 —

- 暦』永永2年(1395)7月26日条(『大日本史料』第7巻之2、pp76))。
- 24) 『門史記』(巻三、安徳法四) 貞治5年(1366)12月23日安徳法四の記録中に「北二対屋」が記述されている。川上註1前掲論文(pp164)もこれによって、北二対屋における「一対」の存在を推定する。
- 25) 京対がその位置から「北二対屋」のように「北」を冠する対屋に比定し難いことから、北二対屋の対屋は2棟以上。しかし一方で京対北東部を別棟で占める大規模な京対と京対・台所の存在から3棟以上の余剰は無い。そこで2棟と推定した。
- 26) 京対については平面構成推定の史料が不足する。北向きで規模が相当大きく、常御所としても用いられた「京四間」が天皇御座所にあてられたこと(川上註1前掲論文)、また京対は常置されなかったこと(池田道人「南北朝・室町期における場の使用形態と会所の形成」『日本歴史』295号、1972年、pp27)、などが明らかにされている。『後鳥羽記』建永元年(1379)閏4月28日条によれば、当日夜の儀々参内に際して京対は会所に堂礼され、朝から儀々開始された(如宣堂)飾り付けは「以佛堂佛堂張天井、裁金銀珠玉飾殿内云々」というものであった。また飾り付けは翌日も撤去されず、雄人が見物している(29日条)。また京対での御座会を記す「京御記」建永元年(1381)8月15日条によると、大文二帖で北向の御座は上にあるとして、御座北方、右下左右に高灯台をたて、さらに御座の高門座が南北行に設けられた。ただし「御座」は京東西、おそらく御座に向き合う形であった。この御座は「京子」上であった。御座について「奥座」「御座」という表現や「京御記」から、会場は京面する空間と推定され、あるいは天皇御座所の「東四間」に相当するものか、なお前掲白近衛門図から京殿前縁・松の畝上があった(『京御記』建永元年(1381)7月25日、8月18日、8月20日各条)。
- 27) 『門史記』(巻三、安徳法四) 貞治5年(1366)12月23日条「一、道場莊・紫宸殿中央以母屋東西五間同南北二間間南端為道場」の通り、京殿をもつて「紫宸殿」と呼称している。ほかに例えば『後鳥羽記』貞治6年(1367)8月19日条に「紫宸殿」(『御守記』同日条に「南殿」とある。なお此足ながら、【図1】に記された京殿南側の京・西の「後大」(『大』は「京殿」=紫宸殿)を示す。
- 28) 『門史記』(巻三、安徳法四) 貞治5年(1366)12月23日条において「紫宸殿」の「母屋」「同間」(=南端)とされる空間は、南殿としての「京御座」にあたる。京御座は京殿の場としてみえる(『後鳥羽記』建永元年(1381)12月21日条、同文和元年(1352)11月15日条、「宿信持記年譜」建永4年(1371)4月27日条、『大日本史料』第6巻之34、pp52)、『宿信持記年譜』建永3年(1392)12月26日条、『大日本史料』第7巻之1、pp56)。なお前掲註1前掲論文は、その一例として、尾形裕宏「就緒の史的考察」『日本学芸研究』第8巻第1号、1950年3月の「就緒論」一文(pp34)に引用される、崇光天皇の貞和4年(1348)12月15日における就緒を挙げている。しかし28日まで天皇は土御門内庭に不在である。
- 29) 『京御記』永永元年(1375)2月21日条に「大閣・予・南庭出右台座所、寄座理明、大閣(奥)・余(姫、與太殿座也)・南庭(姫、余座下、入自宮子座也)各入自西面、太閣并余入自北庭、其外入自南庭、」とある。このとき京殿所から京殿西面子座を産て奥閣へ参入した列席者のうち、上位の太閣(二条良基)と余(近衛道満)は北の上座に対座し、南庭(九条義隆)は余座の下(南方)に着座した。かかる京座位置に対応して太閣と余は西面北間から参入、対するに南庭は西面南間の奥子から参入したという。
- 30) 『大正新修大蔵經』國譯第11巻『大正新修大蔵經刊行会、1934年5月(1989年2月、普及版)では、夜御殿の西階室を朝儀と記す(『pp468)、本館では『大日本史料』第6巻之29所収の圖(pp286~287)に依る。
- 31) 『京御記』建永元年(1368)5月13日条「今夜主上登御座頂云々、被召宿秘御座前庭、前右衛門督後直宿御座前、」
- 32) 朝儀の全体規模は、平安後期の平安宮内庭では2ヶ間の室、建永内庭でも同様のが、【図1】の「朝儀」記述箇所を勘案すると南北3ヶ間かもしれない。本館では一応2ヶ間とした。
- 33) 『大日本史料』第6巻之29、pp201-204。
- 34) 京向で規模8間とは「京御記」永永元年(1375)3月18日条「有出儀御所、京向八間也、」でも確認できる。なお『門史記』(巻四、弘明法二) 建永元年(1381)4月29日条に「道場殿・京向(御定所)以四箇間為其所」とある「四箇間」は、京面(正面)の柱間数を記すもの。
- 35) 『仲光公記』建永元年(1368)3月10日条(『大日本史料』第6巻之29、pp201)「以殿後所為道場、其前廊落座、為地下侍候(人カ、使者註)座、修業所所云々、」
- 36) 『大日本史料』第6巻之29所収の【図4】にはみえないが、『改訂史記』および『臨法院図説』(内閣文庫所蔵)所収の図には、京御座北方、京定所北東隅柱から北1間の位置に柱を記し、京定所北東隅の存在を一層示す。「貞治二年條」(『大日本史料』第6巻之25、pp81)が、京定所京座での臨法院見物に際し、御座を「御殿の京面(御定所)五間」に設け渡しと記すのも傍証となる。なお永永6年(1373)4月26日~5月3日における京定所での法華堂法の指図が『迎駕記』26日条(『大日本史料』第7巻之3、pp932)に記される。京定所は京向、規模は南北4間京西2間で、南側の「二間」を京土局にあてたもの【図4】と一致する。そしてこの図でも京定所北側に「大文二帖」が設けられ、室の存在を窺わせる。
- 37) 内庭における京定所は、『日本国語大辞典』第5巻「小字館、1973年9月、」京定所の項(pp574)によれば、後醍醐天皇による元亨年間(1321)の設置がその嚆矢。上記検討した京定所は何れも中期以降。この内庭における京定所設置の時期に照して、以下3点の注目をすべき要素がある。一つは「京御記」建永元年(1368)6月22日条に、「今夜京御座御座云々、被召宿御座同所、仍有此御座」とあるように、この時「御座同所」が新設されていること。京定所とは対照的に御座同所は、管見では「皇太極」貞和元年(1345)11月28日条に、大神殿前による神樂皇曲伝授の場としてみえる「御座同所前庭」が最も早く、これは1期の初期とある。その後設置に類するにも関わらず、建永元年(1368)の設置に京定所から姿を消したと消す(後光厳天皇即位直前における、京定所御座や皇子御座・立親王といった皇座をめぐる天皇による前白二条良基への諮問、あるいは内々の京定の場としてみえるが(『後光厳院御記』建永3年(1370)11月15日条(『大日本史料』第6巻之32、pp340)、同記建永4年(1371)12月29日条(『大日本史料』第6巻之33、pp328)、それらに「京面」「京向」といった形容はなく、位置も不明。これが二つ目。そして三つ目に、「京面御座同所」(『皇太極』建永元年(1350)正月1日条および同2月27日条)、「京向御座同所」(『後鳥羽記』建永元年(1368)11月28日条(『大日本史料』第6巻之19、pp286))など、御座同所が記されるとき「京面」や「京向」を冠する場面が多いことから、御座同所もまた京定所と同様、京面した存在としてある。以上3点に京定所の要素上の初見が建永4年(1359)4月であること(註17)を勘案すると、以下の推定が可能である。まず1期の早い時期に、中期の京定所の位置とは御座同所であった。その後、建永元年(1368)御座同所は別の場所へ新設された(場所不明)。そこで御座同所のもとと場所とは京定所がなされた。その時期は建永元年(1368)6月の御座同所新設と同時あるいは遅くとも建永4年(1359)4月以前、ということである。『京御記』建永4年(1359)4月12日条「御座所今日始拜見、凡殊御々々、」という道満の記録が、その頃の京殿修業を推測しめめる。いずれにせよ京定所の1期当初からの存否は不明と言わざるを得ない。文和元年(1352)9月27日の京定所場所の推定は京定所(京殿)の『御守記』当日条、文和2年(1353)10月28日の京定所の会場も奥閣だったことは(『京御記』「玉葉抄」当日条(『大日本史料』第6巻之18、pp437))、この時期における京定所の不在を示唆するものか。
- 38) 『迎駕記』貞治3年(1364)8月9日条(『大日本史料』第6巻之26、pp110)。
- 39) 『皇太極』貞和元年(1345)10月21日条に「京面常御所」とある。これは京殿内の常御所なら、1期の常御所は京面したことになる。なお後代については新皇後「近世以前の内庭における清涼殿内常御所の形態について(上段の成立経路の研究2)」「日本建築学会論文報告集」244号、1976年6月。
- 40) 『御守記』貞治6年(1367)8月19日条「又被宣之令令昇殿、常御所并御座マテ通入者發有之、」
- 41) 『大日本史料』第7巻之3、pp145。 42) 川上註1前掲論文pp193。
- 43) 『後鳥羽記』永永5年(1379)正月7日条は足利義満の天皇との対面時の座落を「後日上殿降云、先於台座所御座前、其後還皇戸内如朝朝入道、参参御所、准后同按此席、蓋の八人、主上御座御座前、…(下略)」と記す。
- 44) 京殿内の常御所は、京殿公記』永永2年(1382)4月11日条、『後小松院院記』建永5年(1398)正月1日、30日各条、「迎駕記」永永6年(1399)4月28日(『大日本史料』第7巻之3、pp933)、5月1日(『大日本史料』第7巻之3、pp934)、9月30日(『大日本史料』第7巻之4、pp122)各条、同記建永8年(1401)正月30日条(『大日本史料』第7巻之4、pp869)にみえ、御殿殿上は、「皇太極」文和5年(1356)正月16日条、「迎駕記」建永4年(1371)3月23日条(『大日本史料』第6巻之33、pp444)、「荒曆」建永3年(1396)正月12日条(『大日本史料』第7巻之3、pp346)に各々みえる。
- 45) 『皇太極』建永3年(1344)正月1日条「出降殿、〔須出第一間也、而此皇居御座一問也、〕南行、至紫宸殿〔南、〕とあるように、紫宸殿としての京殿の、西南隅の土蔵柱間1間分が京殿であった。なお『皇太極』建永3年(1356)8月14日条、「御座抄」(巻11)上、「紫宸殿坐代々例条」永永元年(1375)8月28日、明徳3年(1392)11月3日各条(『日本古典全集 殿内御座』日本古典全集刊行会、1933年11月、pp1350-1)によると、御座始では朝儀に天皇御座、御座は板を敷いて師座座となった。
- 46) 『大日本史料』第6巻之13、pp510-515。
- 47) 殿上の規模は不明。「小板敷」が「皇太極」建永3年(1344)正月1日条、「荒曆」建永2年(1395)正月7日条(『大日本史料』第7巻之1、pp918)、同3年(1396)正月1日条(『大日本史料』第7巻之3、pp325)にみえ、また『後鳥羽記』建永3年(1383)正月2日条「主上於年中行事殿子刃〔殿上戸前、〕、京宣公記』建永元年(1394)7月5日条(『大日本史料』第7巻之1、pp574)「出上戸、僅年中行事殿子刃南庭并台座所南広庭、御殿西子座、至南庭子座行、…(下略)」とあり、殿上上戸とは殿上南面に臨み、年中行事殿子座はその南東、台座所南広庭の西端に存在したと考えられる。ほかに「殿上侍」が「門史記」(巻三、安徳法四) 貞治5年(1366)12月23日条、「建永三年京御座前庭」建永3年(1370)7月6日条(『大日本史料』第6巻之32、pp182)にみえる。
- 48) 『公家公記』建永元年(1350)3月22日条(『大日本史料』第6巻之13、pp511)「子孫御座会、出儀之後、京火次第寄座、〔奥殿相分、御座人或自座後子座着之、或自座末西面間、或自座前之間、同取、〕」
- 49) 『大日本史料』第6巻之20、pp372-376。
- 50) 『皇太極』文和5年(1356)2月30日条「公卿座有絶座、御前殿減少之間端置一佔敷之〔為読師座也、〕。なお同じ「皇太極」の建永3年(1344)2月28日条に、初度御座始会場となった黒戸について「黒戸北面四ヶ間、放障子等為其所、北第一間京西行、發大文二帖為御座、同第二三四間奥二行、發小文為公卿座、西北二面卷御座也、」と記す。これによれば黒戸は南北に長い奥座ながら、端で「又奥、南、障子三ヶ間御座也、」とある奥座が「南」という注記を尊重して、前記引用中の「北第一間」の「北」を「東」の誤記とすると、建永元年(1350)作文御座会文和5年(1356)詩歌御座会と同様の京座になる。ただ規模を「四ヶ間」とするのは、西1間分を会場内に取り込んだことによるか。
- 51) 足利義満の黒戸参内について記す『後鳥羽記』永永元年(1375)4月25日条(『大日本史料』第6巻之43、pp317)「太閤間台座所与黒戸間之障子被候之、」
- 52) 『皇太極』文和5年(1356)2月30日条「京方發大文高座、御後方立御座屏風、〔有有壁也、〕、」
- 53) 『荒曆』建永2年(1395)8月4日条(『大日本史料』第7巻之2、pp86)「直命上殿不参、近侍例、内侍於台座所参前、召置原在殿、期直命云々、」また「皇居」建永4年(1359)4月28日条に「台座所御座戸」とある。
- 54) 『京宣公記』建永元年(1394)7月5日条(『大日本史料』第7巻之1、pp574)。
- 55) 『京御記』永永元年(1375)2月27日条。 56) 川上註1前掲論文pp167。
- 57) 【図9】と【図10】の異同は、【図9】のもととなった【図1】【図8】と【図10】の3者における、柱や奥具の有無などの相違による。【図10】が板敷直直として描く小御所南面について、【図9】は【図1】【図8】に依拠し、【図10】は参考していない。小御所平面の推定元元にあたっては、【図9】を基本としつつ、当該箇所について【図10】によって補訂、改変した。
- 58) 京殿奥の柱間は小御所南面京殿のそれと一致せず、奥の奥間は小御所の柱間より若干広い。奥は南北3間規模の別荘であろうか。
- 59) 「建永三年京宣公記」建永3年(1370)6月24日条(『大日本史料』第6巻之32、pp153)「道場前庭御座所は、小御所内に設けられた如き法道場近くにおける京殿所の存在を示唆する。ほかに例えば「建永三年京宣公記」建永3年(1370)6月27日条(『大日本史料』第6巻之32、pp168)の御注「小御所為御殿之間、以京殿所為殿上、殿人所無其所之間、以京殿所為其所、掃部殿御座、」あるいは「後鳥羽記」永永3年(1373)3月24日条「黒戸除目始也、…(中略)…同白又儀直、〔京小御所、当時京殿所也、〕」も京殿所の小御所内での存在を示す。
- 60) 『大日本史料』第6巻之26、pp110。
- 61) 『御守記』貞治元年(1362)12月15日条は、神事中における儀殿での京殿所参入の可否を記す。その中で元亨2年(1322)の前例で参入に俾り無しの根拠として、「京殿所御座前庭下也」を挙げる。京殿所が小御所本体ではなく、その座をもつてあてられた所以であろう。
- 62) 『後鳥羽記』(『大日本史料』第6巻之30、pp148) 建永元年(1368)12月8日付「朝政口宣」に「京大所何屋屋并柱土御座所等、度々被仰下候了、千今無沙汰、不可然、来十一日沙汰以前、可致其沙汰之由、儀密可令下知路之由被仰下候、…(下略)…」とある。
- 63) 小御所の用途・性格については、川上註1前掲論文pp169。
- 64) ただし建永4年(1371)3月23日の、徳仁親王(後醍醐天皇)元服後の参入では、『迎駕記』(『大日本史料』第6巻之33、pp402)が「到土御門殿東面、太閤於門外御下車、〔前庭下下会此所云々、〕其後寄御車於小御所東面御座、」と記すように、親王の公卿座が設けられた小御所京面(『後鳥羽記』建永元年(1368)3月23日条(『大日本史料』第6巻之33、pp380))に直接入御し、奥は不使用。
- 65) 建永の柱間法については、『門史記』(巻五、長日如宣公記三) 建永元年(1368)5月3日条に「而今所同間七尺五寸也、」とある、京殿柱間の記述を参考にした。
- 66) この内庭の、京殿内庭への参り参り力については、『京殿』小御所・京殿の位置関係や対屋の記述をもとに、すでに指摘されている(川上註1前掲論文pp171)。なお2の京殿の別館について建永内庭内では異なる。
- 67) 前註66および同第二章第二節「京殿内庭の小御所」pp173~175。
- 68) 拙著「融合空間の形成とその変容——中世「会所」の形態に関する研究——」『日本建築学会計画系論文』519号、1999年5月、同「御座所の空間的性格」『日本建築学会計画系論文』525号、1999年11月。
- 69) 『京』の御座始は貞治2年(1363)5月11日(『貞治二年御座始』、『大日本史料』第6巻之22、pp85)、「内々」のそれは建永4年(1359)4月12日(『皇太極』)。なお京殿内庭皇座失後の仮皇居、伏見宮貞成親王御所の京殿(京殿)西面の京定所も、その西庭で御座があった(鈴木大次郎「仮皇居となった伏見宮貞成親王御所の京殿(仮皇居時代の南殿)の上段と平段」『日本建築学会計画系論文』474号、1995年8月、pp163)。また中世末の上流京家住宅の様子を示すと思われる「匠明」所説「京山殿星家ノ圖」において、主殿北半の休息間に南庭に「御座」の記述があって留意される(太田博太郎監修、伊藤慶太郎校訂「匠明」鹿島出版会、1971年12月、pp301)。京定所の詳細な検討は別稿を予定している。
- 70) 盛田嘉徳「中世親民と雑塗能の研究」雄山閣、1994年2月の第二部第一章「千彩万歳の研究」pp130~139。
- 71) 室木敦太郎「中世近世日本芸能史の研究」周園書房、1992年12月の第二章「大観と大黒」pp17~18。

(2000年7月10日原稿受理、2000年10月2日採用決定)